「かれいひ」の意味

―伊勢物語九段・八橋の場面をめぐって―

山本登朗

一

現代の日本のテレビドラマに食事の場面が多いことはよく知られているが、それとは逆に、平安時代の物語には、ものを食べる場面はめったに登場しない。宴会の場面が多く、しかもその様子が詳細に描写される宇津保物語や、写実的といわれる落窪物語はともかく、源氏物語になると、あの長大な物語の中で、光源氏たちが食事をする場面はほとんど語られることがない。事情は伊勢物語でも同じ、というよりもむしろ、各章段が短く記述が簡単な歌物語では、食事場面の出番はより一層少ない。もっとも、六十九段に、伊勢の国守が主人公をもてなして「夜ひとよ、酒飲み」したことが記されているように、酒宴の場面は伊勢物語にも多いが、そこで必ず供せられたはずの食事のことは、それらの場面では一言も述べられていない。食事や排泄といった実生活に密着した事項を忘れ、あえてそれを語らないところに、平安貴族の、そしてこれらの物語の基本的な美意識があった。二十三段の高安の女が、「手づから飯がひとりて」飯を盛ったために、いかに主人公に嫌悪されたかを考えれば、そのことは容易に理解されるはずである。

ところが、その伊勢物語の九段、あのよく知られた八橋の場面では、「沢のほとりの木のかげ」で馬を下りた主人公たち一行は、次のように、そこで「かれいひ」を食したと語られている。

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋と言ひけるは、水ゆく川のくもでなれば橋を八つわたせるによりてなむ、八橋とは言ひける。その沢のほとりの木のかげにおりゐて、かれいひ食ひけり。…

同じ九段の隅田川の場面には都鳥が「水の上に遊びつつ魚を食ふ」と記されているが、鳥ではなく人が何かを「食ふ」ことが語られている場面は、伊勢物語中に他にはまったく見られない。なぜ、この八橋の場面に、わざわざ食事のことが記されているのだろうか。

二

この問題に答えることは、ひとまずは容易である。さきに前半を掲げた九段の八橋の場面は、次のような後半に続いているが、その末尾にはもう一度「かれいひ」についての言及があって、さきの食事の場面がこの末尾の記述を導き出すための伏線であったことは、誰の目にも明らかだからである。

その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。そ

れを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふいつもじを句の上にするて、たびの心をよめ」と言ひければ、よめる、

　から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙落としてほとびにけり。

「かれいひ」とは、「一度炊いた米飯を干し固めた、携帯用の食料」（『小学館古語大辞典』）で、「通常は湯や水でもどして」（同）食した。その「かれいひ」が大量の涙のためにふやけて、湯も水も不要になったと言うのである。

稲田利徳氏「人が馬から下りるとき―「伊勢物語」の世界―」（『国語と国文学』昭和五三年八月）は、伊勢物語中他に二箇所に存在する、主人公が「馬から下りる」場面では、主人公は美しい風景を愛でるために下馬しているのに、この八橋の場面だけは、その本文の記述によれば、休息して「かれいひ」を食べるために下馬したことになっている点を問題にする。そして、「木陰に下馬してから杜若を発見したのではなく、杜若の美しさにひき寄せられて下馬したとするのが、原作者の、ここに企画した表現ではなかったのか」と述べたうえで、古今集に収録された「から衣」の歌（巻九・羇旅・四一〇）の、次のような詞書に注目する。

（前略）その川のほとりにかきつばた、いとおもしろく咲けりけるを見て、木の陰におりゐて、かきつばたといふいつもじを句のかしらにするて、旅の心をよまむとてよめる

ここでは「かれいひ」も食事場面も登場せず、主人公は美しい杜若を見て下馬したことになっている。稲田氏は、このような形の本文が伊勢物語九段の原型であった可能性を示唆し、さらに、現存しない小式部内侍本（狩使本）の内容を伝える『異本伊勢物語絵巻』の、次のような詞書にも注目する。

（前略）其河に、杜若、面白さきたり。其河のほとりのこかげにおりゐて、かれいゐくゐけり。この花を見て、京いとこひしくおぼえけり。さりければ、ある人、かきつばたといふ五文字を、句の首におきて旅の心をよめといひければ、あるひとのよみける。

　から衣きつゝなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

といひたりければ、みな、かれいゐのうへに、涙おちてほとびにけり。

この文章には「かれいゐ（ひ）」も登場しているが、ここでは「杜若、面白さきたり」という文が「其河のほとりの木のかげにおりゐて」という記述に先だって記されているため、下馬の理由を、美しい花を愛でるためであったと解釈することが可能である。稲田氏は、伊勢物

語の本文の原型は古今集の詞書に近い形だったのではないかと想定し、それが「後人」の手によって増補されて『異本伊勢物語絵巻』の詞書のような形になり、さらにそれが現在の定家本の本文のように改変されたのではないかと推定するのである。

この場面で主人公たちが食する「かれいひ」が、「俳諧味の感ぜられる趣向の伏線となっている」ことを、稲田氏はもとより承知のうえで、その要素を排除した形の原型を求めようとするが、それは、稲田氏が伊勢物語の主題を「みやび」という「平安貴族の美学」に求めたことからもたらされる、当然の志向であった。食事の場面が平安貴族の美学にそぐわないことは、すでに見たとおり自明の事実だったからである。

だがそれならばなぜ、そのような美学に反してまで「かれいひ」は八橋の場面にこのように用いられているのだろうか。その問題をあらためて考えるためには、八橋の場面の末尾に述べられている「みな人、かれいひの上に涙落としてほとびにけり」という記述の意味するところを、もう一度考え直してみることが必要である。

三

伊勢物語九段の最後は、先にも見た隅田川の場面だが、その末尾は、次のように語られている。

（前略）渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

ここでも、主人公の歌を聞いて、人々は泣いている。また、六十六段の末尾には、次のような記述が見える。

昔、男、津の国にしる所ありけるに、兄おとと友達率ゐて、難波の方にいきけり。なぎさを見れば、舟どものあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

ここでは人々は泣いてはいないが、主人公の歌に心を打たれ、それに満足して帰路に就いている。これらの記述は、主人公の歌に対する人々の反応を語っているが、八橋の場合も含め、これら三場面の記述では二つのことが同時に表現されている。すなわち一つは、主人公の歌がすぐれていて、だからこそ人々の心を打ったということと、もう一つは、その場に、主人公と心を共有することができる複数の「友達」や兄弟がいたということである。九段の記述によれば、都を捨てた主人公の旅は、一人旅ではなかった。彼には同行してくれる「友達」がいた。「から衣」の歌はそもそも、そのような友達の言葉に応えて、一行の前に詠み出された、いわゆる「座の文

学」として産み出されたものだったのである。

それに対して、さきに見た古今集の「から衣」の歌の詞書には、「かれいひ」だけでなく、「友達」も登場していない。そこでは、美しい花を見た作者は、自分で自分に「かきつばたといふいつもじを句のかしらにすゑて、旅の心をよまむ」という課題を課し、一人でそれに応えている。それはどこまでも独詠歌の世界であって、涙で「かれいひ」を濡らして同感してくれる「友達」は、そこにはいない。だからこそ、そのための伏線としての食事場面も、そこには登場していなかったのである。

四

だが、歌に対する人々の反応を語るだけなら、食事の場面を設定したり「かれいひ」を持ち出すことは特に必要がなかったはずである。言うまでもないことだが、そこにはさらに、稲田氏の言う「俳諧味の感ぜられる趣向」があった。「みな人、かれいひの上に涙落としてほとびにけり」という末尾の表現は、平安朝の貴族たちの美学に反することを承知のうえで、というよりも、美学に反するからこそ、読者の笑いを誘うユーモラスな諧謔表現として、ここにこのように、ことさら記されているのである。伊勢物語に、しばしばこのようなユーモラスな表現が見られることは、古く室町時代から注意されており、当時はこれらの表現は「伊勢物語の誹諧」等という用語で呼ばれてもいた。

たとえば伊勢物語六十三段は、三人の成人した子を持つ老女が「心なさけある」恋人を求めるという、一段の設定そのものが「俳諧」的といってよい章段だが、この六十三段の末尾には、主人公が「思ふをも思はぬをもけぢめ見せむ心」の持ち主であったと語られている。そのような、非現実的な、極端に理想化された人物像を表現するためには、通常の設定よりも、このような「誹諧」的設定の方が適切であった。「伊勢物語の誹諧」は、単に読者を楽しませるためだけでなく、その表現内容とも密接に関わった語りのスタイルの一種として、意図的に用いられているのである。

主人公の歌に感動して一行が涙を流すこの場面で、なぜ諧謔表現が仕組まれているのか。説明は容易ではないが、だからといってその笑いの要素を切り捨ててしまうことは、さまざまな要素を豊かに含み持つ伊勢物語の表現世界を、単調なものに変えてしまう。いまはひとまず、この、いわば「泣き笑い」ともいうべき末尾表現を、そのままに受け取り、味わっておきたいと考えるのである。

（国文学者・関西大学教授）